特集論文

ジェンダーと老親介護におけるストレス過程

菊澤 佐江子

(法政大学社会学部 准教授)

1. はじめに

わが国の高齢者の家族介護は、これまで多くの 場合女性(特に息子の嫁)に期待され、また担わ れてきた。しかし近年、家族介護者に占める男性 介護者の割合が増えている。2010年「国民生活基 礎調査」厚生労働省データによると、2001年から 2010年にかけての9年間に、同居の主な介護者に 占める男性の割合は、23.6% から 30.6% に増加し ている。男性家族介護者(2010年)の内訳を続柄別 にみると、息子が51%と最も多く、これに夫(45%)、 その他の親族(4%)が続く。晩婚化・非婚化が進 む中、今後かつての嫁による介護はさらに減少し、 息子や夫が介護者となるケースは増えると予想さ れる。しかし、「男性による介護」は、ジェンダー の違いから、これまで伝統的に家族介護を担って きた女性介護者とは異なる困難を抱える可能性が あり、今後彼らに有効な介護者支援施策を検討す るうえでも、その実態解明が求められている。

高齢者介護における家族介護者のストレス・メカニズムの解明に寄与しうるモデルとして代表的なものに、Pearlinら(1990)のストレス過程モデルがある。このモデルの特徴の一つは、介護に伴う困難(ストレッサー)を、要介護者のニーズやそのニーズによって要請される介護の度合いに基づくストレッサー(一次ストレッサー)と、介護の継続により介護者の他の社会生活領域に追加的に生じるストレッサー(二次ストレッサー)に分けてとらえ、前者が後者に拡散する過程(stress proliferation)をモデル化した点にある。たとえ

ば、一次ストレッサーには要介護者の障害や認知症の状態等が含まれ、二次ストレッサーには、介護によって生じる家計支出の増加や収入の減少等の経済ストレーン¹⁾ (economic strains)のほか、家族介護者がそれまで担ってきた社会的役割(e.g. 家族における役割、職場での役割)の遂行において生じる葛藤や混乱(role conflict/disruption)、友人との社交やレジャー等の社会生活の制限(constriction of social life)等が含まれる(Pearlin et al. 1990, 2001)。このようにストレッサーを分けて考えることにより、高齢者の家族介護におけるストレス拡散過程を詳細かつ多面的に考察することが可能となる。

このモデルはまた、機会・特権・責任等の配分に関わる社会成層における人々の位置等を、ストレス過程に影響を及ぼす背景要因と位置づけており(Pearlin et al. 1990)、ジェンダー等の介護者の社会・経済的特性がストレスの拡散過程に及ぼす影響を検討するうえでも有効と思われる。たとえば、ジェンダーによる社会的役割の保有状況や内容の相違は、介護による一次ストレッサーが二次ストレッサーを生じる領域・程度や、それらがストレス反応(アウトカム)を引き起こす過程が、男女間で異なる可能性を示唆している²。

近年、わが国でも Pearlin ら(1990)のストレス 過程モデルをもとに、ストレス過程の性差の解明 を試みる研究が徐々に蓄積されつつある(e.g. 山田 ほか 2006; 西村 2012)。たとえば、山田ら(2006) は、東京都 A 市在住の要介護高齢者の主介護者 (配偶者)についての調査データをもとに、ストレッ

サー・資源・ストレス反応の状況およびその関連 の性差を分析している。その結果、ストレッサー には性差がみられないが、資源(副介護者や訪問 介護利用等)は男性がより多く保有し、情緒的消 耗や愁訴の度合いは女性に高いこと、また、スト レッサーや資源の情緒的消耗等との関連は男女間 で若干異なり、たとえば認知障害数と愁訴との関 連は女性介護者より男性介護者で顕著であること 等を報告している。西村(2012)の東京豊島区にお ける要介護高齢者の主介護者(配偶者)についての 分析では、一次ストレッサー(被介護者の ADL 障害等)や精神的健康に性差はみられないが、二 次ストレッサー (介護負担感)は女性に高いこと、 心理社会的資源の保有やその効果には若干の性差 がみられるが、他の要因間の関連には男女の共通 性が高いこと等が報告されている。

これらの結果は一次ストレッサーに性差がみら れないという点で共通するものの、他の点につい ては必ずしも共通しておらず、確定的なことがい える段階にない。また、既存研究の多くは配偶者 介護を対象としているが、続柄の異なる介護にお いては、結果が異なる可能性がある(菊澤 2011)。 たとえば、配偶者介護に比べ、老親介護は、ま だ仕事や子育て等に忙しい時期に担うことになる 可能性が高いことから、二次ストレッサーを生じ やすく、また、その拡散過程も性別役割分業を反 映しやすいと予想される。この点において、配偶 者介護を扱った既存研究の多くは、二次ストレッ サーを要因に含まないか(山田ほか 2006)、活動領 域を特定しない合成変数として扱っているが(西 村 2012)、老親介護におけるストレス過程の性差 を検討する際は、二次ストレッサーを家族役割に おける困難、就業役割上の困難等、領域別に多面 的に検討することが特に重要と思われる。

本研究の目的は、老親(義理の親を含む)を介護する40~64歳の男女家族介護者を対象とした調査データをもとに、一次ストレッサー、二次ストレッサー、アウトカムの状況とその関連を分析することを通じて、老親介護におけるストレス拡散過程とその性差を検討することにある。特に、二次ストレッサーについては、経済、就業、家族、

友人との交流等の活動領域別に尺度を設け、一次 ストレッサーが、男女介護者のどのような二次ストレッサーと関連し、また、これらが結果として 介護者の心身の健康にどのように関連しているの か、多面的に検討を行う。

2. データ

分析にあたっては、公益財団法人家計経済研究 所が 2011 年 9~10 月にかけて実施した「在宅介 護のお金とくらしについての調査 |を用いる(詳細 は本号収録の調査概要を参照のこと)。調査対象 となった満40~64歳の中高年男女のうち、今 回の主たる分析対象は、2011年10月調査時点で 要介護の親(または義理の親)に最も長時間介護を 行っている者(主介護者)で、かつ分析に用いた変 数(就業に関するものを除く)に欠損値がみられな かった 314 人(女性 221 人、男性 93 人)である。 調査では、インターネットによる割付調査の特性 を生かし、男性介護者のオーバーサンプリングが 試みられたが、男性介護者に占める主介護者の割 合は女性介護者より少なく、結果として分析サン プルに占める男性の割合は約30%と、2010年国 民生活基礎調査データに基づく値(約28%: ただ し、40~69歳で親または義理の親を介護してい る主な介護者に男性の占める割合)とほぼ同程度 となっている。ただし、調査対象者が、社会調査 会社のモニターであることから、バイアスが存在 する可能性は否めず、結果の解釈にあたっては留 意が必要である。

図表-1(A)は、サンプルの基本的属性を男女別に集計した結果である。性差についてのt検定の結果によると、年齢は男女主介護者とも53歳前後と共通しているが、未婚者は女性(20%)より男性(61%)に多く、大学卒業者(大学院卒業も含む)もまた女性(27%)より男性(65%)に有意に多い。「平成22年国勢調査」(総務省統計局)におけるこの年齢層の一般男女に比べると、未婚率・大卒率の性差のパターンは共通しているものの、今回の調査対象者となった主介護者には、全体的に、高学歴(男女とも)、未婚(男性のみ)の者が多くみら

図表-1 基礎統計量

		女性 (N	N=221)	男性(N=93)				
	平均值	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
A. 属性								
年齢 (実数;歳)	52.65	5.97	40.00	64.00	53.02	6.20	40.00	64.00
未婚 (未婚=1, その他=0)*	0.20	0.40	0.00	1.00	0.61	0.49	0.00	1.00
教育 (大卒=1,その他=0)*	0.27	0.45	0.00	1.00	0.65	0.48	0.00	1.00
B. 一次ストレッサー								
ADL/IADL	20.53	10.40	0.00	40.00	19.80	10.94	0.00	40.00
認知症の程度	3.80	4.03	0.00	16.00	3.44	4.36	0.00	16.00
介護関与度	2.43	1.29	0.00	4.00	2.54	1.31	0.00	4.00
介護年数 (実数;年)	4.96	4.01	0.00	21.50	4.61	3.93	0.17	21.33
C. 二次ストレッサー								
経済ストレーン	3.19	1.73	0.00	6.00	3.09	1.73	0.00	6.00
就業ストレーン (就業者のみ)	4.02	2.48	0.00	9.00	4.52	2.36	0.00	9.00
家族役割の混乱*	4.46	2.46	0.00	9.00	3.13	2.69	0.00	9.00
社会生活の制限	6.38	2.49	0.00	9.00	5.81	2.50	0.00	9.00
D. 心身の健康								
ディストレス	5.66	4.97	0.00	24.00	6.86	6.64	0.00	24.00
全体的健康	3.39	1.10	1.00	5.00	3.16	1.10	1.00	5.00

^{*}当該変数の平均値に男女間で有意差がみられたことを示す (p<.05)

れた。ただし、老親の主介護者である息子に未婚者が多いことは、先行研究と共通している(上田ほか2007)。なお、一部の分析においては、このサンプルに対する比較対照群として、同調査における非介護者データ(40~64歳で65歳以上の介護・手助けを必要としない親・義親と同居する者)を併せて用いた(非介護者データの詳細は、本号収録の調査概要を参照のこと。ただし、本稿の分析においては、2011年10月現在の親・義親の介護状況から非介護者・主介護者を分類し直したこと等により、他稿と若干数値が異なる可能性がある)。

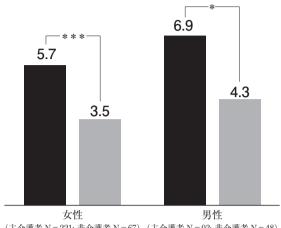
分析に用いる変数は、Pearlinら(1990)の枠組みを参考に、老親介護における一次ストレッサーとして要介護者のADL/IADL、認知症の程度、介護者の介護関与度、介護年数(実数)を用いた。介護が支障をきたす領域としては、経済(家計)、就業、家族(関係)、友人等との社会生活を考慮し、経済ストレーン、就業ストレーン、家族役割の混乱、社会生活の制限を、おのおのの領域における二次ストレッサーの変数とした。また、ストレス

アウトカムとして、ディストレス³、身体的健康を、背景要因として年齢、婚姻状況、教育といった変数を用いた。このうち、ADL/IADLは、「身の回りの物や薬などの買い物に出かける」「電話をかける」等10項目について、「ぜんぜん難しくない」「すこし難しい」「かなり難しい」「非常に難しい」「まったくできない」の各回答に、0~4点を与えて合計した値。認知症の程度は、「自分の年齢がわからないことが多い」「慣れている場所でも、ときに道を間違うことがある」等16項目について「はい」とする回答の合計値。介護関与度は、「歩行・着替え・入浴・排泄などの介護はしていない」「週1日かそれより少ない」「週に2~5日くらい」「かかりきりではないが毎日介護している」「毎日かかりきりで分護している」の各回答に、0~4点を与えた。

経済ストレーンは、「介護を始める前に比べて、総世帯収入が減った」「介護を始める前に比べて、総世帯支出が増えた」の2項目について「まったくなかった」「あまりなかった」「いくらかあった」「かなりあった」の各回答に0~3点を与えた合計値。

図表-2 介護と心身の健康

(1) 介護とディストレス (K6)

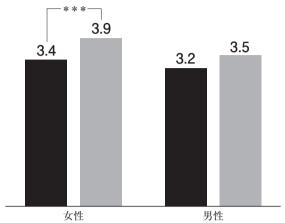


(主介護者 N=221; 非介護者 N=67) (主介護者 N=93; 非介護者 N=48)

■主介護者 ■非介護者

***p<.001, *p<.01

(2) 介護と全体的健康



(主介護者 N = 221; 非介護者 N = 67) (主介護者 N = 93; 非介護者 N = 48)

■主介護者 ■非介護者

***p<.001

就業ストレーンは、過去2カ月の仕事状況に関す る3項目「仕事にさける気力・体力が限られてい る | 「仕事を休みすぎている | 「自分の仕事のでき ばえ(質)に満足できていない |について、「まった くあてはまらない | 「あまりあてはまらない | 「あ る程度あてはまる」「かなりあてはまる」の各回答 に0~3点を与えた合計値。家族役割の混乱は、 「他の家族と一緒に過ごす時間が減った | 「他の家 族のことに思うように手が回らなくなった「「家族・ 親戚と意見があわなくなった | の3項目について 「まったくなかった | 「あまりなかった | 「いくらか あった | 「かなりあった | の各回答に 0~3点を与 えた合計値。社会生活の制限は、「友達と過ごす 時間が減った」「趣味や学習活動などをする「自由 な時間」が減った」「自分のための時間が減った」の 3項目について「まったくなかった」「あまりなかっ た」「いくらかあった」「かなりあった」の各回答に 0~3点を与えた合計値である⁴。

ディストレスの尺度には、6項目の症状(「神経 過敏に感じた」「絶望的だと感じた」「そわそわ、 落ち着かなく感じた」「気分が沈み、何が起きて も気が晴れないように感じた」「何をするのも骨折

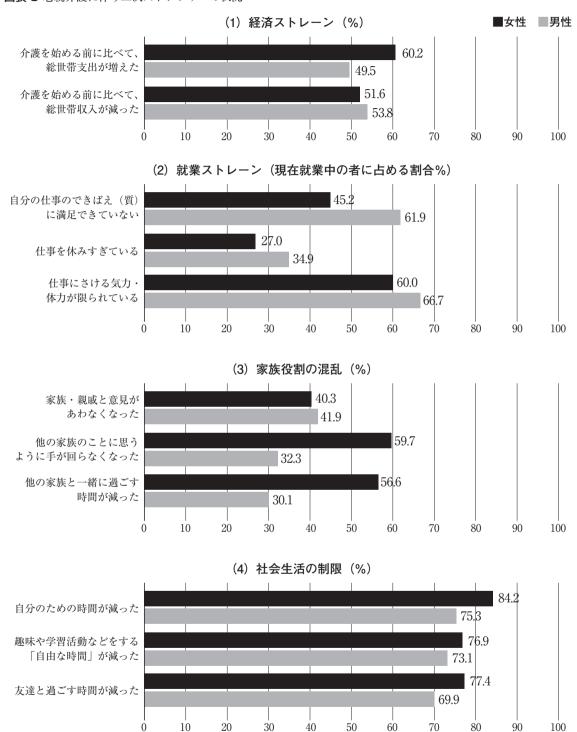
りだと感じた
|「自分は価値のない人間だと感じ た])の過去30日間の経験頻度について、「全くな い | 「少しだけ | 「ときどき | 「たいてい | 「いつも | の各回答に $0 \sim 4$ 点を与えた合計値(K6: Kessler et al. 2002: 川上 2003)を使用した。身体的健康に ついては、全体的な健康について、「よくない」「あ まりよくない」「普通」「まあよい」「よい」とする 回答に、おのおの1~5点を与え得点化した。

3. 分析結果

(1) 男女主介護者におけるストレスの拡散状況

まず、図表-2は、心身の健康に関する変数の 平均値を、主介護者・非介護者間で比較した結果 である。これによると、男女いずれにおいても、 主介護者のディストレスは非介護者より有意に高 く、また女性については、全体的健康についても、 主介護者のほうが非介護者より有意に低い。結果 は、主介護者が介護との関連において心身の健康 を損ねている可能性を示唆している。では、介護 はどのような過程を経て、主介護者の心身の健康 にマイナスの影響を与えているのだろうか。また、

図表-3 老親介護に伴う二次ストレッサーの状況



N=女性221, 男性93 (ただし、就業ストレーンに関する分析については就業者に限るため、女性115, 男性63)

図表-4 二次ストレッサー(4領域)に関する重回帰分析

	経済ストレーン		就業スト	レーン	家族役割の混乱		社会生活の制限	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
属性								
左歩 (歩)	0.02	0.00	- 0.03	-0.06	-0.00	-0.06	0.01	-0.06
年齢 (歳)	(0.02)	(0.03)	(0.04)	(0.05)	(0.02)	(0.04)	(0.02)	(0.04)
+ ff (+ ff 1 2 の fb 0)	- 0.01	-0.12	0.03	-0.53	- 2.56***	- 3.13***	[0.74*]	- 0.61]
未婚 (未婚=1, その他=0)	(0.27)	(0.38)	(0.50)	(0.57)	(0.34)	(0.52)	(0.36)	(0.52)
数本 (上立 12页4 0)	-0.07	-0.34	0.86^{+}	-0.03	0.28	-0.09	0.32	-0.00
教育 (大卒=1,その他=0)	(0.25)	(0.37)	(0.48)	(0.55)	(0.31)	(0.49)	(0.33)	(0.49)
一次ストレッサー								
ADI /IADI	0.03*	0.02	0.06*	0.13**	0.02	0.05^{+}	0.02	0.07*
ADL/IADL	(0.01)	(0.02)	(0.03)	(0.04)	(0.02)	(0.03)	(0.02)	(0.03)
到知点の組織	0.05^{+}	0.08	[0.13*	-0.08	0.07^{+}	0.03	0.16***	0.04
認知症の程度	(0.03)	(0.05)	(0.06)	(0.07)	(0.04)	(0.07)	(0.04)	(0.07)
人类相互开放	0.24*	0.15	0.18	0.32	0.52***	0.21	0.62***	0.39^{+}
介護関与度	(0.10)	(0.17)	(0.21)	(0.26)	(0.13)	(0.23)	(0.14)	(0.23)
た - ボ た * Ł (ケ)	0.01	0.01	0.01	0.15*	0.04	0.05	0.02	0.08
介護年数 (年)	(0.03)	(0.05)	(0.06)	(0.07)	(0.04)	(0.06)	(0.04)	(0.06)
ر ان *ار	0.74	2.07	3.11	4.62^{+}	3.01*	6.23**	2.78*	6.65**
定数	(1.00)	(1.66)	(2.02)	(2.58)	(1.25)	(2.25)	(1.32)	(2.25)
R^2	0.17***	0.14+	0.23***	0.33**	0.36***	0.35***	0.30***	0.25***

^{***}p<.001, **p<.01, *p<.05, *p<.10

図表中の数字は、上段が偏回帰係数、下段()内が標準誤差。[]は、男女全体について変数と性の交互作用を含めた重回帰分析を行った結果、 当該変数と性の交互作用が有意(p<.05)であったことを示す。

N=女性221, 男性93 (ただし、就業ストレーンに関する分析については就業者に限るため、女性115, 男性63)

その過程に性差はみられるだろうか。(以下、本稿では、特にことわりのない限り、「介護者」は「主介護者」をさすものとする。)

図表-3は、二次ストレッサー各項目の経験率を男女別に集計した結果である。まず、経済状況に関しては、女性介護者の約6割、男性介護者の約5割が、「介護を始める前に比べて、総世帯支出が増えた」と回答し、男女介護者ともに5割以上が「介護を始める前に比べて、総世帯収入が減った」と回答している。

今回のデータにおいて介護開始前に就業していた者の中で、介護開始後就業に変化がなかった者は男女とも3~5割と最も多いものの、続いて、「仕事を辞めた」「仕事の時間を減らした」といった回答が多くみられることから、結果はこうした就業調整による収入の減少も反映していると推察される。

一方、就業継続者にも、「仕事にさける気力・

体力が限られている」(女性 60.0%、男性 66.7%)、「仕事を休みすぎている」(女性 27.0%、男性 34.9%)、「仕事のできばえ(質)に満足できていない」(女性 45.2%、男性 61.9%)、という回答が多くみられた。家族生活においては、男女共に「家族・親戚と意見があわなくなった」とする回答が約4割、「他の家族のことに思うように手が回らなくなった」「他の家族と一緒に過ごす時間が減った」とする回答は、男性介護者の約3割、女性介護者の5割以上にみられた。他の社会生活においては、自分のための時間や友人と過ごす時間等の減少を、男女共約7割以上の者が報告している。総じて、老親の主介護者になることは、介護者となった子どもの他の生活領域に多面的な困難を生じていることが明らかである。

図表-1(B~D)は、これらの変数を含め、ストレス過程に関わる全ての変数について、男女別

図表-5 介護者のディストレスに関する重回帰分析

	モデル 1		モデル 2		モデル3		モデル 4		モデル 5	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
属性										
年齢 (歳)	$[-0.10^{+}]$	- 0.46***]	[-0.12*	- 0.46***]	- 0.07	- 0.36*	$[-0.10^{+}]$	- 0.39***]	[-0.11*	- 0.42***]
	(0.06)	(0.11)	(0.05)	(0.11)	(0.08)	(0.14)	(0.05)	(0.10)	(0.06)	(0.11)
未婚(未婚=1, その他=0)	1.66*	- 0.65	1.67*	- 0.58	1.64	0.76	3.59***	2.89^{+}	1.34	-0.25
	(0.83)	(1.41)	(0.79)	(1.40)	(1.04)	(1.69)	(0.89)	(1.54)	(0.82)	(1.39)
教育(大卒=1,	1.55*	- 0.52	1.62*	- 0.31	1.47	- 0.05	1.34^{+}	-0.42	1.41^{+}	- 0.52
その他=0)	(0.75)	(1.34)	(0.71)	(1.33)	(1.01)	(1.62)	(0.71)	(1.22)	(0.73)	(1.31)
一次ストレッサー	-									
ADL/IADL	0.04	- 0.01	0.00	- 0.02	- 0.02	0.01	0.02	- 0.07	0.03	- 0.05
	(0.04)	(0.08)	(0.04)	(0.08)	(0.06)	(0.12)	(0.04)	(0.08)	(0.04)	(0.08)
認知症の程度	0.07	0.12	0.02	0.08	0.04	0.06	0.02	0.09	-0.00	0.10
	(0.09)	(0.18)	(0.09)	(0.18)	(0.12)	(0.21)	(0.09)	(0.16)	(0.09)	(0.17)
介護関与度	0.17	0.69	- 0.06	0.59	- 0.14	-0.17	-0.23	0.44	- 0.10	0.43
	(0.32)	(0.62)	(0.31)	(0.62)	(0.43)	(0.78)	(0.31)	(0.57)	(0.33)	(0.61)
人	0.06	0.29^{+}	0.05	0.28^{+}	0.12	0.22	0.03	0.23	0.05	0.24
介護年数(年)	(0.09)	(0.17)	(0.08)	(0.16)	(0.12)	(0.21)	(0.08)	(0.15)	(80.0)	(0.16)
二次ストレッサー	-									
fore halo h h			0.99***	0.61						
経済ストレーン			(0.20)	(0.39)						
売り3時~~11 ~					0.84***	1.30**				
就業ストレーン					(0.20)	(0.40)				
家族役割の							0.76***	1.13***		
混乱							(0.16)	(0.27)		
社会生活の									0.44**	0.64*
制限									(0.15)	(0.29)
ملا علال	[8.65**	28.38***]	[7.92**	27.11***]	5.44	18.77*	[6.37*	21.34***]	[7.43*	24.11***]
定数	(3.03)	(6.08)	(2.88)	(6.09)	(4.25)	(7.82)	(2.92)	(5.81)	(3.01)	(6.24)
R^2	0.08*	0.22**	0.17***	0.24**	0.24***	0.33**	0.17***	0.35***	0.11**	0.26**

^{***}p<.001, **p<.01, *p<.05, *p<.10

図表中の数字は、上段が偏回帰係数、下段()内が標準誤差。[]は、男女全体について変数と性の交互作用を含めた重回帰分析を行った結果、当該変数と性の交互作用が有意 (p<.05) であったことを示す。

に集計し、平均値の差の検定を行った結果である。一次ストレッサーについては男女介護者間で統計的な有意差はみられず、平均値はそれぞれ、ADL/IADLについては約20、認知症の程度については約3.4~3.8、介護関与度は約2.4~2.5、介護年数は約4.6~4.9年となっている。二次ストレッサーについては、経済・就業ストレーンと社会生活の制限における男女差はみられないものの、家族役割の混乱に関する男性介護者の平均値(3.13)は女性介護者(4.46)より有意に小さい。心

身の健康については、男女介護者間に有意な差異はみられなかった。

(2)一次ストレッサーと二次ストレッサーとの関連

図表-4は、二次ストレッサーに関する重回帰 分析の結果である。結果は、一次ストレッサーが 二次ストレッサーに関連していることを示すとと もに、生活領域によって、また介護者のジェンダー によって、一次ストレッサーと二次ストレッサー との関連のパターンは多少異なることを示唆して

N=女性221, 男性93 (ただし、就業ストレーンに関する分析については就業者に限るため、女性115, 男性63)

図表-6 介護者の全体的健康に関する重回帰分析

	モデル 1		モデ	モデル 2		モデル 3		モデル 4		モデル 5	
-	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	
属性											
左束/ / 基 \	0.01	0.04^{+}	0.02	0.04*	0.01	0.02	0.01	0.03^{+}	0.02	0.04^{+}	
年齢(歳)	(0.01)	(0.02)	(0.01)	(0.02)	(0.02)	(0.03)	(0.01)	(0.02)	(0.01)	(0.02)	
未婚(未婚=1, その他=0)	-0.05	0.41	- 0.05	0.39	- 0.39	0.26	-0.19	0.14	- 0.03	0.40	
	(0.19)	(0.25)	(0.18)	(0.24)	(0.24)	(0.31)	(0.21)	(0.29)	(0.19)	(0.25)	
教育(大卒=1,	0.07	0.23	0.05	0.19	0.28	- 0.06	0.08	0.23	0.08	0.23	
その他=0)	(0.17)	(0.23)	(0.17)	(0.23)	(0.24)	(0.29)	(0.17)	(0.23)	(0.17)	(0.24)	
一次ストレッサー											
ADL/IADL	0.01	0.01	0.01	0.02	0.03^{+}	0.01	0.01	0.02	0.01	0.01	
	(0.01)	(0.01)	(0.01)	(0.01)	(0.01)	(0.02)	(0.01)	(0.01)	(0.01)	(0.01)	
認知症の程度	-0.03^{+}	0.01	- 0.03	0.02	- 0.06*	0.02	- 0.03	0.01	- 0.03	0.01	
	(0.02)	(0.03)	(0.02)	(0.03)	(0.03)	(0.04)	(0.02)	(0.03)	(0.02)	(0.03)	
介護関与度	0.00	- 0.22*	0.04	-0.20^{+}	- 0.08	-0.15	0.03	-0.20^{+}	0.02	-0.22^{+}	
	(0.07)	(0.11)	(0.07)	(0.11)	(0.10)	(0.14)	(0.07)	(0.11)	(0.08)	(0.11)	
介護年数(年)	- 0.01	- 0.03	- 0.01	-0.03	-0.02	-0.03	- 0.01	-0.02	- 0.01	-0.03	
介護平奴(平)	(0.02)	(0.03)	(0.02)	(0.03)	(0.03)	(0.04)	(0.02)	(0.03)	(0.02)	(0.03)	
二次ストレッサー											
ØØ35Ø → 1.1 × 3.			- 0.16**	-0.12^{+}							
経済ストレーン			(0.05)	(0.07)							
小华 中 1.1					-0.07	-0.12^{+}					
就業ストレーン					(0.05)	(0.07)					
家族役割の							- 0.06	-0.09^{+}			
混乱							(0.04)	(0.05)			
社会生活の									- 0.04	- 0.00	
制限									(0.04)	(0.05)	
-I- MA	2.68***	1.14	2.79***	1.39	3.34**	2.76^{+}	2.84***	1.68	2.78***	1.16	
定数	(0.69)	(1.06)	(0.67)	(1.06)	(1.00)	(1.42)	(0.69)	(1.10)	(0.69)	(1.12)	
R^2	0.02	0.12	0.08*	0.15+	0.11	0.12	0.03	0.15+	0.03	0.12	

***p<.001, **p<.01, *p<.05, *p<.10

図表中の数字は、上段が偏回帰係数、下段()内が標準誤差。[]は、男女全体について変数と性の交互作用を含めた重回帰分析を行った結果、当該変数と性の交互作用が有意(p<.05)であったことを示す。

N=女性221, 男性93 (ただし、就業ストレーンに関する分析については就業者に限るため、女性115, 男性63)

いる。たとえば、女性介護者に着目すると、要介護者の障害の程度(ADL/IADL)や介護者自身の介護関与度が、経済ストレーンと正の関連を示す一方、就業ストレーンについては、要介護者の障害や認知症の程度、介護者の教育程度が正の関連を示している。家族役割の混乱については、要介護者の認知症の程度や介護者の介護関与度が正の関連を示すが、社会生活の制限については、要介護者の認知症の程度や介護者の介護関与度が正の関連を、介

護者が未婚であることは正の関連を示している。

一方、男性介護者については、要介護者の障害程度や介護者の介護年数が、就業ストレーンと正の関連を示し、介護者が未婚であることが家族役割の混乱と負の関連を、要介護者の障害程度と介護者の介護関与度が、社会生活の制限と正の関連を示している。

男女介護者間の結果の相違には、サンプル数の 相違も影響していると思われるが、要介護者の認 知症の程度と就業ストレーンとの関連、介護者が 未婚であることと社会生活の制限との関連のあり 方については、統計的に有意な性差がみられた。

(3) ストレッサーと心身の健康との関連

図表-5は、介護者のディストレスに関する重 回帰分析の結果である。まず目をひくのは、一次 ストレッサーについては、介護年数を除き、ディ ストレスとの間に有意な関連はみられず、また、 介護年数についても、男性介護者のディストレス との間に弱い関連がみられるにとどまった点であ る。一方、二次ストレッサーについては、経済ス トレーンが女性介護者のディストレスに有意に関 連していたほか、就業ストレーン・家族役割の混乱・ 社会生活の制限はすべて、男女介護者双方のディ ストレスに有意に関連していた。背景要因につい ては、介護者の年齢がディストレスに負の関連を 示し、この傾向は特に男性介護者に顕著にみられ た。女性介護者では、未婚であること、大卒であ ることが、複数のモデルで正の関連を示した。た だし、男女間で結果を比較すると、年齢とディス トレスとの関連を除き、ストレッサーや背景要因 とディストレスとの関連のありかたについて、統 計的に有意な差異はみられなかった。

図表-6は、介護者の全体的健康に関する重回 帰分析の結果である。ディストレスの場合と比較 して R² 値が小さく、男女とも全体的にモデルの適 合度があまりよくない点が特徴的である。説明変 数についても、一次ストレッサーについては、男 性介護者の介護関与度と全体的健康や要介護者の 認知症程度と女性介護者の全体的健康との間に負 の関連がみられたものの、全体的に有意な関連は ほとんどみられなかった。二次ストレッサーにつ いても、経済ストレーンが男女ともに負の関連を 示したほかは、就業ストレーン・家族役割の混乱 が男性介護者の健康に弱い負の関連を示すにとど まった。背景要因については、男性介護者の年齢 と全体的健康との間に、ほぼ一貫して弱い正の関 連がみられた。ただし、いずれの偏回帰係数にお いても、男女間で統計的に有意な差異はみられな かった。

4. 考察

本稿の目的は、老親介護におけるストレスの拡 散過程とその性差を検討することにあった。まず、 記述的分析を行った結果、老親介護にたずさわる 男女介護者のストレッサーは、介護場面にとどま らず、経済生活をはじめ家族生活、社会生活など の生活諸領域に拡散していることが示された。ま た、男女介護者間で、一次ストレッサーのレベル や心身の健康に差異はみられなかったが、二次ス トレッサーにおいては、家族役割の混乱において 顕著な性差がみられた。先行研究では、配偶者 介護においてストレッサーの性差がみられないこ とが報告されているが(山田ほか 2006)、本研究 の結果は、老親介護においても、介護している親 の障害や認知症の程度といった一次ストレッサー については、性差がみられないことを示してい る。二次ストレッサーについても、家計収入の減 少・支出の増加といった経済ストレーンや、仕事 や友人との交流などの社会生活の制限は、男女と もに過半数以上が経験している。しかし、老親の 主介護者である息子には比較的独身者が多く、ま た既婚の場合は一般的に女性の方が配偶者や子ど もへのケアを期待される傾向にあることから(大和 2004)、介護による家族役割の混乱は、女性介護 者に多くみられると考察される。

一次ストレッサーの二次ストレッサーへの拡散 過程についても、男女介護者間で多くの共通点が みられたが、相違点もみられた。まず、男女共に、 一次ストレッサーと二次ストレッサーとの間には 総じて有意な関連がみられたが、その関連のあり 方は、一次ストレッサーの種類や介護者のジェン ダーによって若干異なることが示された。たとえ ば、女性介護者において、介護への関与度は就業 ストレーンを除く全ての二次ストレッサーと関連 していたが、要介護者の障害程度は、経済・就業 ストレーンとのみ関連していた。また、要介護者 の認知症の程度は、女性介護者には、経済ストレー ン以外の全ての二次ストレッサーと関連していた が、男性介護者には関連がみられず、特に就業ストレーンとの関連には有意な性差がみられた。結 果は、介護ストレスの拡散過程を検討する際、ストレッサーの種類や介護者のジェンダーを考慮することの大切さを示唆している。

一次・二次ストレッサーと介護者の心身の健 康との関連については、まず、男女共に、介護者 の心の不調の多くは、一次ストレッサーと直接的 に関連しているのではなく、むしろそうしたスト レスの拡散による二次ストレッサーと関連してい ることが示された。この結果は、少なくとも介護 者の心の健康という観点から考えると、介護者の 支援施策を考える際、一次ストレッサーそのもの の軽減に着目するのではなく、その二次ストレッ サーへの拡散を緩和するような介入に着目する ことが有効である可能性を示唆するものであるが、 現時点では、この点に関する既存の知見は混在し ており(Pearlin et al. 2001: Starrels et al. 1997)、 またその多くは国外の研究によるものであること から、わが国におけるさらなる研究蓄積が求めら れる。また、各変数のディストレスとの関連のあ り方は男女介護者間でほぼ共通しているものの、 介護者の年齢とディストレスとの関連は男性介護 者に顕著に大きいことが、就業ストレーンを投入 したモデル以外の全モデルで示された。同じ男性 介護でも、介護経験は特に若い男性介護者にとっ てストレスフルなものとなっている可能性が考察 される。

全体的健康については、男女共にモデルの適合 度が低く、一次・二次ストレッサーと全体的健康 との間にみられる関連も限られていた。全体的健康は、ディストレス以上に、介護以外のさまざま な要因の影響を受けることを反映した結果と考察 される。しかし、弱い関連ではあるが、経済スト レーンなどの二次ストレッサーは全体的健康得点 の低さと関連しており、介護による家計状況の変 化は介護者の心身両面に関連していることが示された。また介護関与度が大きい男性介護者には健康状態がよくない傾向がみられるなど、一次スト レッサーと全体的健康との関連も部分的に示された。なお、男性介護者の年齢と全体的健康の関連 が、就業ストレーンを投入したモデル3以外で一 貫してみられたことは、ディストレスの結果と共 通している。

本稿は、Pearlinら(1990)のストレス過程モデ ルをもとに、老親介護において男女主介護者のス トレスの拡散過程を多面的に明らかにすることに よって、今後の介護関連施策に新たな資料を提示 するものである。ただし、本稿で行った分析は、 一時点のデータを用いたものであること、サンプ ルの代表性や数といった点で限られている。今後、 このモデルを、代表性のあるより大規模な時系列 データによって検討することが求められる。また、 本稿で検討したモデルは Pearlin ら(1990)のモデ ルの一部であり、ソーシャルサポートなどの緩和 要因がストレス過程に及ぼす影響については、紙 幅の都合もあり、今回検討することができなかっ た。今後、こうした点についても分析を進め、老 親介護における男女主介護者のストレス過程の全 容を明らかにすることも、残された課題である。

謝辞

本稿は、公益財団法人家計経済研究所の調査研究プロジェクト「ケアと家族に関する研究(平成22年度~24年度)」の研究成果として執筆された。また、その過程では執筆者個人として科学研究費補助金(課題番号21730465、22243038)の助成を受けた。

注

- 1) 本稿では、ストレーンを慢性的なストレッサーを表す概念として用いる。
- 2) Pearlinらのモデルは、このほかコーピング (問題状況 に対して本人が起こす対処行動) やソーシャルサポート などの緩衝要因を含むものであるが、本稿では、紙幅の 都合もあり、ストレッサーとアウトカムの関連に焦点を 絞って分析を行った。緩衝要因の効果については稿を 改めて論じたい。
- 3) 身体的健康に対し、精神的健康面でのアウトカムの把握を目的とする変数であり、「個人の内面において経験される不快な状態」(稲葉 1991) をさす。
- 4) これらの変数/項目の作成にあたっては、下記の文献・資料を参考にさせていただいた。ADL/IADL:東京都老人総合研究所 ミシガン大学全国高齢者パネル調査(1987年)Q46および東京都老人総合研究所『介護保険制度下における要介護高齢者と介護者の実態調査報告書』p.178「高齢者の生活と福祉に関する実態調査」調査票、問12-16。認知症の程度:東京都老人総合研究所社会福祉部門編,1996,『高齢者の家族介護と介護サービスニーズ』光生館および東京都老人総合研究所,2003,『介護保険制度下における要介護高齢者と介護者の実態調査報告書』p.122「三鷹市における高齢者

の生活実態調査 (ご家族用)」問11。二次ストレッサー: Pearlin et al. (1990, 2001)。

汝献

- 稲葉昭英,1991,「ディストレスの社会的文脈――直系制 家族の男性基幹成員を対象として」『家族社会学研究』 3:61-71.
- 上田照子・荒井由美子・西山利政,2007,「在宅要介護高齢者を介護する息子による虐待に関する研究」『老年社会科学』29(1):37-47.
- 川上憲人編,2003,『厚生労働省厚生労働科学研究費補助 金 厚生労働科学特別研究事業 平成14年度総括・分 担研究報告書 心の健康問題と対策基盤の実態に関 する研究』,22章.
- 菊澤佐江子, 2011,「ジェンダーと介護ストレス――高齢 者介護の場合」『家族関係学』30: 179-187.
- 厚生労働省,「国民生活基礎調査(平成22年、平成13年)」『e-Stat 政府統計の総合窓口 GL08020101』 (http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001031016 最終閲覧日2012年12月25日).
- 総務省統計局,「平成22年国勢調査」『e-Stat 政府統計 の総合窓口 GL08020101』(http://www.e-stat.go.jp/estat/html/NewList/000001039448/NewList-000001039448.html 最終閲覧日2012年12月25日).
- 東京都老人総合研究所 社会参加・介護基盤研究グループ、 2003、『介護保険制度下における要介護高齢者と介護 者の実態調査報告書――介護保険制度施行前後の比 較と介護保険のプロセス評価』.
- 西村昌記, 2012, 「夫婦間介護におけるストレスプロセス ——構造方程式モデリングによる性差の検討」『家族 社会学研究』24 (2): 165-176.
- 山田嘉子・杉澤秀博・杉原陽子・深谷太郎・中谷陽明, 2006,「配偶者としての高齢者介護ストレス――性差 への着目」『社会福祉学』46(3):16-27.

- 大和礼子, 2004,「介護ネットワーク・ジェンダー・社会階層」 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋﨑尚子編『現代家族の構造 と変容——全国家族調査[NFR]98]による計量分析』 東京大学出版会, 367-385.
- Kessler, R. C., P. R. Barker, L. J. Colpe, J. F. Epstein, J. C. Gfroerer, E. Hiripi, M. J. Howes, S.-L. T. Normand, R. W. Manderscheid, E. E. Walters, and A. M. Zaslavsky, 2003, "Screening for Serious Mental Illness in the General Population," Archives of General Psychiatry, 60 (2): 184-189.
- Pearlin, L. I., J. T. Mullan, S. J. Semple, and M. M. Skaff, 1990, "Caregiving and the Stress Process: An Overview of Concepts and Their Measures," *The Gerontologist*, 30: 583-594.
- Pearlin, L. I., Mark F. Pioli, and Amy E. McLaughlin, 2001, "Caregiving by Adult Children: Involvement, Role Disruption and Health," *Handbook of Aging and the Social Sciences, Fifth Edition*, San Diego: Academic Press, 238-254.
- Starrels, Marjorie E., Berit Ingersoll-Dayton, David W. Dowler, and Margaret B. Neal, 1997, "The Stress of Caring for a Parent: Effects of the Elder's Impairment on an Employed, Adult Child," *Journal of Marriage and the Family*, 59 (4): 860-872.

きくざわ・さえこ 法政大学社会学部 准教授。主な著書に『心の病へのまなざしとスティグマ――全国意識調査』(共編著,明石書店,2012)。計量社会学(家族、福祉)専攻。